

舌に発生した類基底細胞癌の1例

佐藤 宏紀¹⁾, 小原 修幸¹⁾, 瀧 重成¹⁾, 小崎 真也¹⁾, 吉村 理¹⁾,
石井 保志²⁾, 深澤雄一郎²⁾

要 旨

症例は69歳男性。来院の8ヶ月前から舌の腫瘍を自覚し、増大傾向を認めたため、当科に初診となった。初診時、舌背側に長径4cmの腫瘍を認めた。外来で腫瘍生検を施行したところ病理組織学的に低分化型の扁平上皮癌の診断となった。全身麻酔下に舌部分切除術および気管切開術を行った。最終病理組織診断結果は類基底細胞癌 (basaloid squamous cell carcinoma) であった。術後の治療として化学療法を施行し、現在再発もなく経過は良好である。類基底細胞癌は比較的まれな扁平上皮癌の異型である。本腫瘍は組織像が複雑であり、診断が難しい。臨床的には高度の遠隔転移により予後不良と報告されており嚴重な経過観察が必要である。

キーワード：扁平上皮癌、類基底細胞癌

はじめに

類基底細胞癌 (basaloid squamous cell carcinoma) は基底細胞癌の一部に扁平上皮癌が混在するまれな腫瘍である。この腫瘍は組織像が複雑であり、扁平上皮癌、腺様嚢胞癌、粘表皮癌、小細胞癌などとの鑑別が必要となる。今回、舌背側正中に発生した類基底細胞癌の1例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症 例

69歳 男性

主訴：舌腫瘍、摂食困難。

現病歴：初診の8ヶ月前から舌腫瘍を自覚し、腫瘍が徐々に増大し摂食しづらくなったためX年4月23日に当科を初診した。

既往歴：高血圧、高尿酸血症。

家族歴：特記事項なし。

初診時現症：舌背側正中のやや後方に長径4cmで表面不整な隆起性病変を認めた (図1)。頸部リンパ節腫脹は認めなかった。

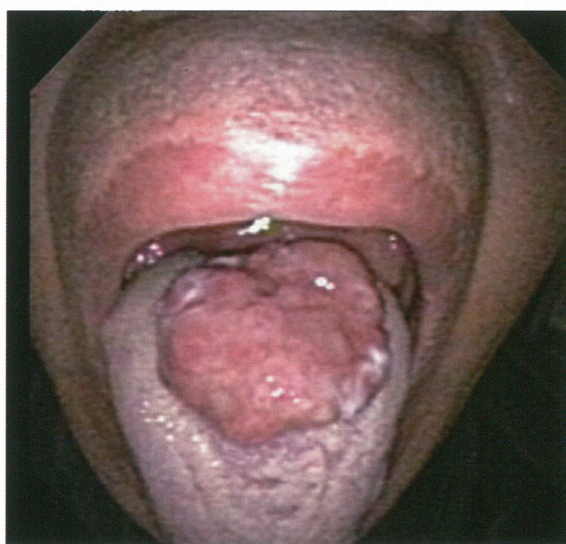


図1. 初診時現症

舌背側正中のやや後方に長径4cmで表面不整な隆起性病変を認めた。

1) 市立札幌病院 耳鼻咽喉科・甲状腺外科

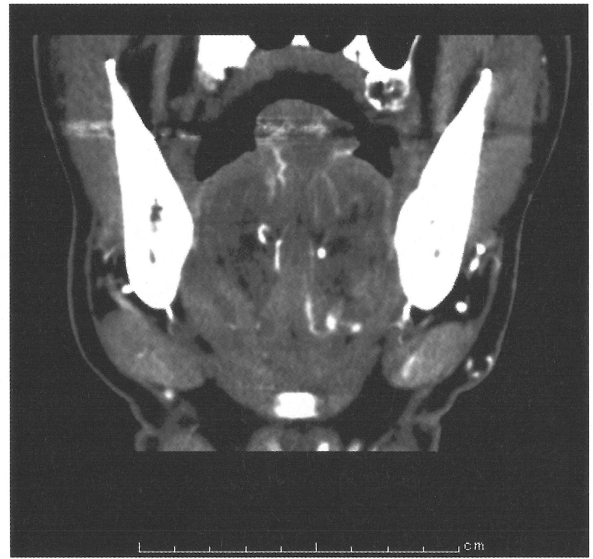
2) 同 病理診断科

検査所見：喉頭ファイバー検査所見上、咽頭・喉頭に異常所見を認めなかった。頸部造影CT画像では舌背側に内部が不均一に造影される高さ20mm、横径39mm、前後径38mmで外向増殖性の腫瘍を認めた（図2）。MRI画像では舌背側にT1 low signal intensity、T2 high signal intensityの腫瘍を認めた（図3）。いずれの画像でも腫瘍の浸潤は舌深部に達していないと判断された。

瘍を認めた（図2）。MRI画像では舌背側にT1 low signal intensity、T2 high signal intensityの腫瘍を認めた（図3）。いずれの画像でも腫瘍の浸潤は舌深部に達していないと判断された。



a) 水平断



b) 冠状断

図2. CT所見
舌背側に内部が不均一に造影される腫瘍を認めた。



a) T1強調画像



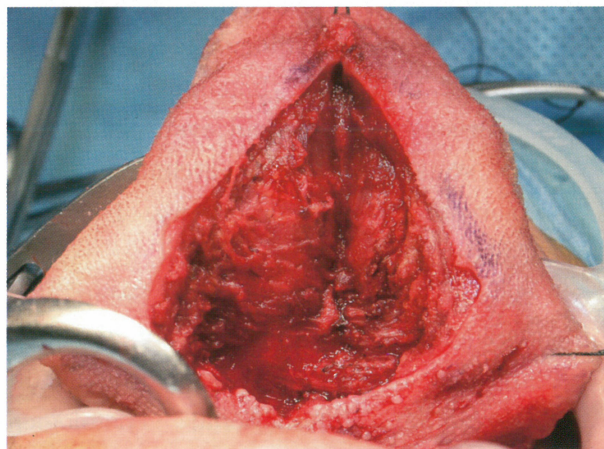
b) T2強調画像

図3. MRI所見
舌背側にT1 low signal intensity、T2 high signal intensityの腫瘍を認めた。

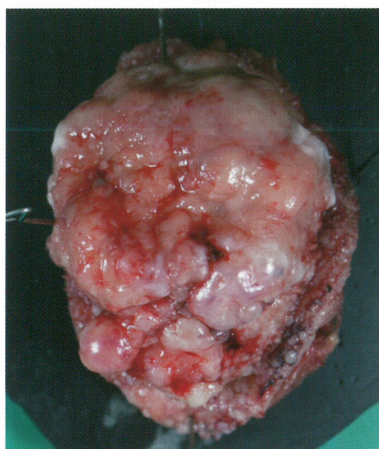
臨床経過：外来にて病変部位から生検した結果、低分化型の扁平上皮癌との病理診断であった。このため加療目的にX年6月10日全身麻酔下に気管切開術および舌部分切除術を施行した。腫瘍基部から7.5mm程度の安全域をつけて腫瘍を摘出した後（図4）、創部を一期的に縫縮した。腫瘍の周囲ならびに深部の切除断端に腫瘍の浸潤は認めなかった。術後の経過は良好で6月25日に退院となった。術後、5ヶ月の時点でドセタキセル（DOC）、シスプラチン（CDDP）、5-FUによる化学療法を施行し現在、術後7か月を経過している

が再発の兆候はなく、外来で経過観察中である。

病理組織学的所見：摘出した腫瘍は類基底細胞癌（basaloid squamous cell carcinoma）と診断された。HE染色では上皮と連続して角化傾向を伴いながら増殖するsquamous cell carcinomaの像が一部に認められたが、大部分は核 / 胞体比の高い腫瘍細胞が索状あるいは胞巣状構造をとり、粘液様ないし硝子様の間質と壊死を伴いながら浸潤増殖する像を認めた（図5）。

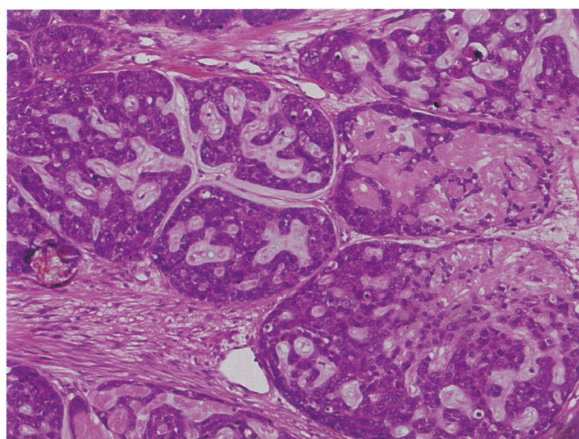


a) 腫瘍摘出後



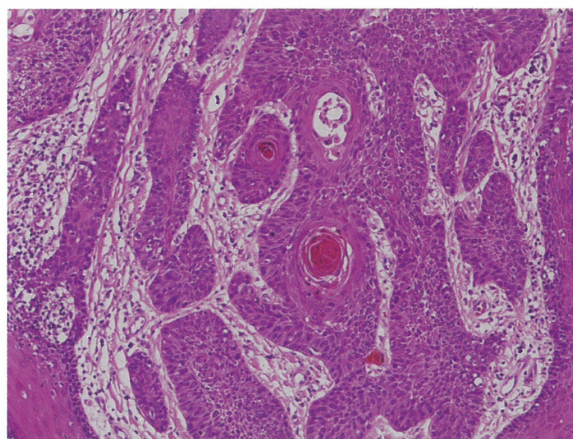
b) 摘出検体

図4. 術中所見
腫瘍基部から7.5mm程度の安全域をつけて腫瘍を摘出した。



a) 類基底細胞層

H.E.染色 100倍
核/胞体比の大きい小型の類基底細胞が充実性胞巣を形成し、しばしば柵状配列を伴う。



b) 扁平上皮層

H.E.染色 100倍
上皮細胞層内には中から高分化型扁平上皮癌が存在する。

図5. 組織学的所見

考 察

類基底細胞癌は類基底細胞層と扁平上皮細胞層が混在する悪性腫瘍である¹⁾。全頭頸部癌のうち2%に発生するとの報告²⁾があり、比較的まれな疾患である。本疾患は以前より皮膚科領域で知られていたが、頭頸部領域では1986年にWainらにより初めて報告された¹⁾。1991年にはWHO (World Health Organization) の組織型分類に独立疾患として定義されている³⁾。病理学的には類基底細胞層において核/胞体比の大きい小型の類基底細胞が充実性胞巣を形成し、しばしば柵状配列を伴う。また、類基底細胞増殖部はその表層において扁平上皮細胞層と連続し、その上皮細胞層内には中から高分化型扁平上皮癌が存在する。これらの特徴から鑑別診断として扁平上皮癌、腺様嚢胞癌、粘表皮癌、小細胞癌などがあげられ、診断が難しいとされている⁴⁾。これまでの報告でも初回の診断が間違っていた症例が認められていた⁵⁾。本症例においても外来で施行した生検では低分化型の扁平上皮癌の診断であった。原因として腫瘍表層を採取した可能性や検体量が十分ではなかった可能性が考えられた。本疾患の治療は手術が基本であり、加えて通常扁平上皮癌に準じて放射線療法、化学療法も併用される⁴⁾。Larnerらの報告によれば一般的に放射線療法の感受性は良いとされている⁶⁾。化学療法はシスプラチン、5-FU、ドセタキセル、ネダプラチンなどの投与が報告されているが有効性ははっきりとしていない^{4) 7) 8)}。予後は通常扁平上皮癌に比べて高率にリンパ節転移と遠隔転移をきたし不良とされている。各報告により幅はあるがFerlitoらの報告では5年生存率は17.5%とされている^{9) 10)}。

本症例では手術により腫瘍を完全切除出来た。しかし、高率にリンパ節転移、遠隔転移する可能性があり化学療法を追加した。なお今後、再発を認めた場合には放射線療法施行を検討しており厳重な経過観察が必要と考えられる。

ま と め

舌に発生した類基底細胞癌の1症例を報告した。術前の生検では扁平上皮癌との結果が得られ、術後の病理組織検査により類基底細胞癌との診断と

なった。手術により腫瘍を完全切除できたが高率にリンパ節転移、遠隔転移する組織型であり、追加治療として化学療法を行った。現在、再発の兆候はなく経過良好である。今後も厳重に経過観察を行う予定である。

参考文献

- 1) Wain SL, Kier R, Vollmer RT, et al: Basaloid-Squamous carcinoma of the tongue, hypopharynx, and larynx: report of 10 cases. *Hum Pthol.* 1986; 17: 1158-1166
- 2) Klijanienko J, el-Naggar A, Ponzio-Prion A, et al: Basaloid squamous carcinoma of the head and neck. Immunohistochemical comparison with adenoid cystic carcinoma and squamous cell carcinoma. *Arch Otolaryngol Head Neck Surg.* 1993; 119: 887-890
- 3) Shanmugaratham K and Sobin LH: Histological typing of tumors of the upper respiratory tract and ear. World Health Organization International Histological Classification of Tumours. Histological Typing of Tumors of the Upper Respiratory Tract and Ear. Springer-Verlag, Berlin. 1991; 31
- 4) 坂部亜希子, 鈴木 秀明, 宇高 毅, 他: 頭頸部基底細胞癌の2例. *耳鼻臨床* 2006; 99: 55-60
- 5) 森田 倫正, 森 幸威, 伊禮 功, 他: 喉頭に発生した類基底細胞癌例. *耳鼻臨床* 2003; 96: 909-913
- 6) Larner JM, Malcolm RH, Mills SE, et al.: Radiotherapy for basaloid squamous cell Carcinoma of the head and neck. *Head Neck.* 1993; 15: 249-252
- 7) 平海 晴一, 平塚 康之, 佐藤 宏昭, 他: 下咽頭類基底細胞癌例. *耳鼻臨床* 1999; 92: 881-884
- 8) 村川 哲也, 田部 哲也, 村田 保博, 他: 中咽頭類基底細胞扁平上皮癌例. *耳鼻臨床* 2003; 96: 57-61
- 9) Ferlito A, Altavilla G, Rinaldo A, et al:

Basaloid squamous cell carcinoma of the larynx and hypopharynx. Ann Otol Rhinol Laryngol. 1997; 106: 1024-1035

10) 竹本 剛, 竹野 研二: 下咽頭類基底細胞癌
例 2014; 107: 3: 247-250

A case of basaloid squamous cell carcinoma of the tongue

Hiroki Sato¹⁾, Nobuyuki Obara¹⁾, Shigenari Taki¹⁾, Shinya Kozaki¹⁾,
Tadashi Yoshimura¹⁾, Yasushi Ishii²⁾, Yuichiro Fukasawa²⁾

1) *Department of Otolaryngology Thyroid Surgery, Sapporo City General Hospital*

2) *Department of Pathology, Sapporo City General Hospital*

Summary

The case was a 69-years-old man who was aware of the tumor on the tongue for eight months. Physical examination demonstrated a tumor measuring 4 cm in diameter on the midline of the tongue. The histopathological diagnosis was low grade squamous cell carcinoma through biopsy at the first time. He underwent transoral resection, and the lesion was histopathologically diagnosed as basaloid squamous cell carcinoma. After surgery, he underwent chemotherapy for an additional therapy. He is currently free from disease now. The basaloid squamous cell carcinoma is a rare variant of squamous cell carcinoma. Because the basaloid squamous cell carcinoma has complex organization images, it is difficult to diagnose this tumor. The prognosis is poor because of distant metastasis. It is necessary to strict observation in this case.

Keywords : squamous cell carcinoma, basaloid squamous cell carcinoma